

見えざる敵

海野十三

青空文庫

シヤンハイすまろ
上海四馬路の夜霧は濃い。

黄いろい街灯の下をゴソゴソ匍うように歩いている二人連の人影があつた。

「——うむ、首領かしらの家いえですぜ。丁度七つ目の地下窓ちかそうにあたりまさあ」

と、斜ななめに深い頬傷ほおきずのあるガツチリした男が、首領の袖そでをひっぱった。

「よし。じゃ入れ、ぬかるなよワーニヤ」

と、首領と呼ばれた眼玉が魚のように大きい男は、懐中からマスクを出して、目にかけた。

合図の数だけ入口を叩くと、重い木製の扉ドアが静かに内に開いた。

前室ぜんしつを通つて、次の部屋にとびこむと、ここはガランとした広間だ。

ガランとしたこの室には、中央に大きな古い卓テーブル子こが一台。そのほかには隅に背の高い衝立ついたてが一つあるばかり。

「おお、——」

と声があつて、その衝立のうしろから現われた異様いような人物。長い中国服を着、その上に白い実験衣をフワリと着ている猫背ねこせの男だつた。頭髪とうはつも髭ひげものびっぱなしで、顔の中か

ら出ているのは色の悪いソーセイジのような大きな鼻だけだった。両眼の所在は、煙

色むりいろのレンズの入った眼鏡に遮さへぎられて、よくは見えない。服装や身体つきから見ると、

中国人らしいところもあるが、大きな鼻や深い髭から見ると西洋人のようでもある。

「やあ、楊博士ヤンはかせ」とワーニヤは、相手を楊博士とよび、「こつちが首領ウルスキー氏だ」

楊博士は、よろめくようにして卓子の縁ふちをつかんで、グツと顔を前につきだした。

「おお貴様だ。さあ盗んだものを早く返せ」

楊博士は髭をブルブルふるわせて叫んだ。

「うむ、これだろう」

と、ウルスキーは上着の下からピカピカ光る人の顔ほどある黄金おうごんの環かんを出して、博士の方に見せた。

「あッ、それだッ」

と、博士が蛙かえるのようにとびついてゆくのをワーニヤが横合よこあいからとんできて、博士の身体をつきとばした。

博士はドンと尻餅しりもちをついて、蟾蜍ひきがえるのように膨ふくれた。

「ど、どっこい、そうはゆかないよ。見かけに似合にわわず、太い先生だ。これが欲しければ、

約束どおり、あれを実験して見せる。よく話をしてあつた筈じやないか」

博士は膝頭ひざがしらに手をおいて、ヨロヨロと立ちあがったが、

「じゃあ、実験をして見せりや、必ず返すというんだナ」

「そうだ。待たせないで早くやらないか」

博士はシブシブと承知の色を示した。

彼は腰を折りまげて、卓子テーブルの下を覗きこむと、のろのろした立居振舞たちいふるまいとはまるでちがった敏捷びんしょうな手つきで、一抱ひとかかえもあるうという大きな硝子壘ガラスびんをとりだして、卓子の上に置いた。その壘は横に大きな口がついて、扁平へんぺいな摺り合わせあの蓋ふたがついていた。

「さあ、こつちへよつて、よく見るがいい」

博士は手招きてまねした。

首領しゅりょうウルスキーは、それツとワーニヤに目くばせをして、今のうちに、奥まった隅にある衝立の蔭を見ておけと合図あいずをした。

ワーニヤは楊博士が卓子の上の硝子壘に氣をとられている間に、衝立のうしろを素早く覗いてみたが、そこには仕切られた土間と壁があるばかりで、外に何物も見えなかった。

ウルスキーはワーニヤの答に、安心の色を見せた。怪博士楊羽ようぼうの魔術？には、これまで

に幾度も苦い目にあつていたから。

「さあ、この中を見るがいい。お前たちには何が見えるかナ」

二人の訪問客は、博士の指す硝子壺のなかを覗きこんだが、中は正しく空つぽで、なにも見えなかった。

「なにもないじゃないか」

「そうだ。それでいい」と博士は髭に蔽われた大きな口をひんまげて薄笑いをし「では待つて居れ。こうすると何か見えるかナ」

と、博士は壺の胴中どうなかについている蓋をひらいて、懐ふところから出した小さな紙袋から二匹の蠅はえをポンポンと壺の中に追いやり、そして蓋を締めた。

二匹の蠅はブンブン唸りながら、壺のなかを勢よく飛びまわっていた。

「なアんだ。蠅を入れたのじゃないか。それが見えなくてどうする」

ウルスキーは莫迦ばかにされたとても思つたものか、腹立たしそうに叫んだ。

「蠅が二匹、たしかに見えるというのだナ。それでよしよし」楊博士は軽く肯うなずき「では暫く、この壺の中の蠅をよく見ておれ。よく見ておれば、今になにか異変を発見するじやろう。そのときは、儂わしにいつてくれ」

「なにか異変を、だって。うむ、ごま化かされるものか」

二人は顔を硝子壘のそばによせ、目玉をグルグルさせて、壘の中をとびまわる蠅の行方ゆくえを追いかけていた。

そのうちに二人は、

「オヤ、——」

と叫んだ。つづいて間もなく、

「オヤオヤ。これは変だ」

と愕おどろきの声をあげた。

「なにか起つたかナ」

「うむ。蠅が二匹とも、どこかに行つてしまった」

「蠅の姿が見えなくなつたというわけだナ。どこへも行けやせんじやないか。密閉した壘の中だ。どこへ行けよう。第一壘に耳をあてて、よく聞いてみるがいい。蠅はたしかに壘の中を飛んでいるのだ。翅はねの音が聞えるにちがいない」

二人は半信半疑で、大きな硝子壘に耳をつけてみた。

「なるほど、たしかに翅がブーンブーン唸うなっている。それにも拘からず蠅の姿が見えない。

これは変だ」

ウルスキーとワーニヤは、互いに顔を見合わせて、怪訝な面持だった。

しばらくして二人は、云いあわせたようにホツと吐息をついた。

「さあ、これで儂の『消身法』の実験は終わったのだ。約束どおり、その金環を返して貰おう」

と、楊博士はウルスキーの手から金環をふんだくった。ウルスキーは呆然としている。「これだこれだ。この金環だ。ああよくもわが手に帰ってきたものだ。わが生命よりも尊いこの世界の宝物！ どれ、よく中を改めてみよう」

黄金の環が、その宝物かと思つたが、博士はその環の一部をしきりにねじった。すると環が縦に二つにパクリと割れた。博士はソツと片側の金環をとりつけた。中は空洞であった。つまりこの金環は、黄金の管を丸く曲げて環にしてあるものだった。

「ややツ。無いぞ無いぞ、大切な宝物がない。オイどうしたのだ。世界一の宝物を早くかえせ」

ウルスキーは気がついて、

「なにを喧しいことをいうんだ。黄金の環はちやんとお前の手に返っているじゃないか」

「金環きんかんが宝物だといってはいないじゃないか。この環の中に入れてあったものを返せ」

「なにも入っていないかったじゃないか」

「嘘をつけ。たしかに入っていた」

「なにをいうんだ。それじゃ一体何が入っていたというんだ」

「毛だ。毛が一本入っていた」

「毛だつて？ はッはッはッ。そうだ、ちぢれた毛が一本入ってたナ。その毛が何だ。毛なんてものは掃はくほどあるじゃないか」

「その毛を返せ。あれは世界の宝物なのだ。十萬メートルの高空で採さい取しゆした珍しい毛なんだ。それを材料にして調べると、他の遊ゆう星せいの生物のことがよく分るはずなんだ。世界に只一本の毛なんだ。これ、冗談はあとにして、その毛をかえせ」

「この『消身法』の実験装置ととりかえならネ」

「うむ、そんなことはいやだ」と楊博士は首をふった。

「ええい面倒くさい。話はこれだ」と、首領ウルスキーは懐中からピストルを出して、博士の胸もとにつきつけ「折せ角かくかえしてやろうというのに、要いらなきや黄金の環もこつちへ貰もらつて置く。おいワーニヤ。お前はその『消身法』の硝ガラス子びん壘を貰もらつてゆけ」

「へへえ、この気味のわるい硝子壘をですかい」

そのとき卓子の下から濛々もうもうと煙がふきだした。

「ほら、博士の奥の手が始まった。早く引きあげないと、またこの前のようにひどい目に遭あう、気をつけろ」

首領の怒鳴っているうちに隙すきがあつたものか、博士はヒラリと身を翻ひるがえして、衝立のうしろに逃げこんだ。

「どこへ逃げる。こいつ、待てッ」

とウルスキーは博士を衝立のうしろに追いこんだ。だが、彼は衝立のうしろに、何にもない空間を発見したに過ぎなかつた。そこへ逃げこんだにちがいない博士の姿がまるで煙のように消えてしまったのである。

「ワーニヤ、硝子壘をもつてすぐ逃げろ。ぐずぐずしていると、生命が危い」

ワーニヤは決心して硝子壘を抱かかえあげた。壘はわりあいにか重かつた。

二人は出口の方へ向つて走りだした。

とたんにガチャンと大きな音がした。

「失敗しまった」

とワーニヤが叫んだが、もう遅かった。彼の抱えていた硝子壘は床の上に墜ちて、粉々こなごなになった。

二人はワツといつて、外に飛び出した。

どっちへ行つてよいかわからぬ四馬路すまろの濃い霧の中を、二人は前になり後になり、必死に駆け出した。

それでも、とにかく博士の追跡をのがれて、首領ウルスキーとワーニヤは、一時間あまり後に仏租界ふつそかいに聳えたつ大東新報ビルだいつしんぽうの裏口の秘密扉ドアの前に辿りついた。

悪漢あつかんウルスキーなる人物は、マスクを取ると、いま上海シヤンハイ国際社交界の大立者おおだてものとして知らぬ人なき大東新報社長ジョン・ウルランドその人に外ならなかった。ウルランド氏は、謹厳きんげんいやしくもせぬ模範的紳士として、社交界の物言う花はなから覗ねらいうちの標的まどとなっていた人物だった。

秘密ボタンを押すと、扉ドアがひらいた。二人はビルの中へ転ころげこむように入つていった。奥まった密室あんらくいすの安楽椅子あんらくいすのうえに身体をなげだすと、二人は顔を見合みあわせた。

「おいワーニヤ。なんだつて、あれほど大切な壘を床の上に落したんだ。大きな苦心を積んで、やっと手に入れたと思つたのに、手前の腕も鈍にぶつたな」

「鈍ったといわれちや、俺も腹が立ちますさあ。なアに、あの壇には長紐がついていて、その元を卓子テーブルにくくりつけてあつたんです。その紐をやつが、やつぱり目に見えないやつだったんで、俺だつて化物ばけものじゃないから、見えやしません。腕からスポンとぬけて、足の下でガチャンといったときに、ハハア目に見えない紐がついてたんだなど、気がついてたつてえわけです。化物でもなけりや、はじめから気がつく筈がない。——」

「ワーニヤ、愚痴ぐちをいうのはよせ。いまさらグズグズいつたつて、元にかえりやしない」ウルスキーは腹立たしそうに、太い葉巻をガリガリと噛んだ。

「ねえ、首領かしら」とワーニヤは機嫌をとるように入った。「楊博士の奴は、ひどく悄気しよげてたじゃないですか。たかが、たつた一本の毛のことでねえ。莫迦ばからしいっちゃないや」

「うん。学者なんてものは、おかしなものさ。だが——」と彼は起き直つて「あれがほんとに十萬メートルの上空で採取さいしゆしたもので、火星の生物の毛でもあつたら、こいつは素晴らしい新聞の特種とくだねだ。よオし、こいつは儲け仕事もうけだ。オイ、ワーニヤ、お前すぐ編集次長のカメネフを電話でよびだせ」

「でも首領」とワーニヤは急に不安な顔をして「こいつは大きに考え物ですぜ。あの宝物の毛をなくしたことについて博士は千萬ドルの紙幣を焼かれたようにブルブル慄ふるえて怒つ

ていましたぜ。あいつはきつと復讐せずにはいないでしょう。ああそれなのに、あの火星かせいじ獣ゆうの毛のことをうちの新聞に素っぱぬくなんて、彼奴の憤慨ふんがいの火に油を注そそぐようなものですよ。そしてもしか、社長がギャングの大將だと嗅かぎつけられてごらんなさい。そのときは新聞の読者は半分以下に減へりますよ。これは考えなおした方がいい」

「なにを臆おく病びょうなことをいいだすんだ。こんな素晴らしいチャンスを逃がすなんてえことが出来ると思うかい。引込んでいろ」

「だって首領。あの楊博士と来た日にや……」

「うるさい。黙つてろ」

ウルスキーは肘掛椅子ひしかけいすからバネ人形のようにとびあがって、嗅かいかけの葉巻を力一杯ゆかにたたきつけた。

その夜は無事に過ぎた。

次の日のお昼休みにレーキス・ホテルに出かけたウルスキーならぬ大東新報社長ウルランド氏は、午後二時になつても社へ戻つてこなかった。十分すぎに、例の火星獣の毛の原稿かかを抱かかえて待つていた次長が、遂に待ちかねてホテルに電話をかけた。すると意外なる話にぶつかった。

「ウルランド氏の姿が、貸切りの休憩室に見えなくなっています。部屋には内側からチャンと鍵がかかっているのに、どうされたんでしょうか。これから警務部へ電話をして、警官に来て貰おうと思っていたところですよ」

「なんでもいいから早く社長を探してくれ。急ぎの原稿があるんだ。社長に早く見せないで、乃公は鹹になるんだ」

そういつた次長も、上衣をつかむが早いかすぐエレベーターの方に駛っていた。社長を至急探しださねばならない。

工部局の警官隊がロッジ部長に引率されて、レーキス・ホテルにのりこんできた。休憩室の扉は、華かに外からうち壊された。一行は、誰もいない室内に入ったときに、なんだか低い唸り声を聞いたように思ったが、室内を探してみると、猫一匹いなかった。全くの空室だった。

「いいかね。ウルランド氏は室内に入ると、内側から鍵をかけて、上衣をこの椅子の上にかけて、靴をぬぎ揃えてこつちのベッドに長々と寝た。——それだけは推理で分つとる」

とロッジ部長は得意そうに、あたりを見廻したが、事実ウルランド氏の靴も上着も、そこには見えなかったのである。社長は服装ごと、どこかに姿を消してしまったのである。

ウルランド氏の失踪事件は、たちまち上海の全市に知れわたった。

「大東新報社長、白昼レーキス・ホテルの密室内に行方不明となる！」

「ウルランド氏の失踪。ギャング団ウルスキーマ味の仕業と見て、目下手配中！」

などと、新聞やラジオでは、刻々にその搜索模様を報道して、町の人気をあおりたてた。騒ぎは、ますます大きくなってゆく。

工部局の活動、秘密警察の協力、素人探偵の競演——などと、物すごいウルランド氏搜索の手がつくされたが、ウルランド氏の話は更にわからなかった。

今日こそは、明日こそはと、市民たちもウルランド氏の発見を期待していたが、すべては空しく外れてしまい、やがて二週間の日が流れた。ウルランド氏の生命は、誰の目にもまず絶望と見られた。

ところがここに一人、ウルランド氏の生命の安全なることを知っている人物があった。それは当のウルランド氏そのひとに外ならなかった。

彼は、もうかれこれ十日あまりも、町の騒擾を見てくらしているのだった。彼は、シヨーウインドーらしき大きな硝子をとおして、一部始終を眺めて暮らしているのだった。彼の前には、紛れもなく賑かな上海、南京路の雑沓が展開しているのだった。そ

れも暁あかつきの南京路の光景から、明るあけ陽ひをうけた繁華はんかな時間の光景から、やがて陽は西かたむに傾かたむき夜の幕とばりが降りて、いよいよ夜の全世界と化かした光景、さては夜も更ふけて酔漢すいかんと、彼の手下どもが徘徊はいかいする深夜の光景に至るまで、大小洩だいしょうもれなく、南京路の街頭を見つくし見飽あきているのだった。

どうしたことからこうなったのか、彼には始まりがよく分らなかつた。

ともかくも、捕虜ほりよになつたなと気がついたときは、今から十日ほど前のことだ。彼はこのショーウィンドーの中に長々と伸びていたのだ。

それからこの細長いショーウィンドーの中の生活が始まつた。彼は一步もその中から出されなかつたのだ。

彼の目の前を過ぎゆく人に向つて、S O Sを叫んだ。硝子をドンドン叩いて、通行の人の注意を喚起かんきした。しかし誰一人、彼の方を見る者がなかつた。

「変だなあ。なぜ、こつちを見てくれないんだろう」

彼は諒解りようかいに苦しんだ。彼の鼻の先に男や女がとおるのである。それにも拘かからず、誰もこつちを向いてくれない。こんな情なさけない話はなかつた。

或るときは、市民の一人がショーウィンドーに背をもたせかけて、大東新報を読みだし

た。彼は自分の失踪事件がデカデカとでてるのを知った。

「おい、ウルランドはここにいるんだ」

とその男の背中と思うあたりの硝子を破れんばかりに叩いたが、彼は背中に蚤がゴソゴソ動いたほども感じないで、やがて向うへいつてしまった。

三日目に、手下のワーニヤが乾分をつれてゾロゾロと通っていった。彼は必死になって、手をふり足を動かし、ゴリラのように喚いたが、それもやっぱり無駄に終った。

雑沓のなかの無人島に、彼はとりのこされているのだ。普通の無人島ならば、救いの船がとおりかかることもある。だが、この細長い巷の無人島は、完全に人間界を絶縁されてあつた。

三度三度の食事だけは、妙な孔からチャンと差入れられた。それは子供が食べるほどの少量だったので、彼はいつもガツガツ喰った。

排泄作用が起つたときには、そこに差入れてある便器に果たした。はじめは雑沓する大通りを前にして、とてもそんな恥かしいことは出来なかつたが、どうやらこつちから往来が見えても、外からこつちが見えないと分つてからは、すこし気が楽になった。そのうち彼は往来を檻の中の猿のようにジロジロ眺めながら用を足すまでになった。

通行人の新聞面を見ていると、いよいよ彼ウルランド氏の生命は絶望となつたと出ていた。彼はもうすっかり弱りきつて、腹を立てる元氣もなかつた。

十一日目に、はじめて彼のうしろの壁から人の声が聞えてきた。

「悪漢あつかんウルスキーよ。その硝子函ガラスばこの居心地いごちはどうじやネ」

「あッ、——」とウルランド氏は顔色をかえた。それは正まぎに、例の楊博士ヤンはかせの皺枯しわがれ声こゑに相違なかつたのである。

「はッはッはッ。今ぞ知つたか。消身法しょうしんほうの偉力いりよくを」

「なにッ」

「汝なんじの手に触ふれる板硝子と、往来から見える板硝子との間には、五十センチの間隙かんげきがある。その間隙に、儂わしの発明になる電気廻折鏡かいせつきようをつかつた消身装置が廻っているのだ。汝なんじの方から見れば外が見えるが、外から見ると何も見えないのだ。どうだ分つたか」

ウルランド氏は蒼白そうはくになつて戦慄せんりつした。

「おいひどいことをするな。早くここから出してくれ。貴様の云うことは何でも聞くからここからすぐ出してくれ」

楊博士は薄笑いをして、

「まあ自分そこに逗留するがいい。だが町もいい加減見飽きたらうから、消してやろう」

そういつた声の下に、今まで見えていた往来が、まるで日暮れのように暗くなり、やがて真暗なあやめも分らぬ闇と変りはてた。その代り電灯が一つポツンとついた。

それと入れ代つて、繁華な南京路の往来では、俄かに騒ぎがはじまった。シヨウウインドーの中で、半裸体になった紳士が、いかがわしい動作を通行人に見せているというので、たいへんな人だかりだった。

そのうちに、何だあれは行方不明のウルランド氏ではないかといいい出した者があり、それは一大事だと騒ぎはますます大きくなっていった。これは楊博士が、消身装置の廻折鏡を反対に廻したために、今まで見えていたシヨウウインドー外の光景が見えなくなり、その代り今まで外から見えなかったシヨウウインドーの内部が明らさまに見えるようになったのだった。そういうこととはしらず、シヨウウインドーの中のウルランド氏は悠々と公衆の面前で用をたしている。市民は愕きかつ呆れ、やがてはとめどもなく笑いだした。なんとという無恥であろうか。

警官隊が駈けつけたが、そのウルランド氏を堅固な硝子函の中から救いだすには、ま

る一日かかった。二枚の板硝子の間に仕掛けられていた楊博士の消身装置は、その救助作業のうちに壊こわされてしまった。

救い出されたウルランド氏は、転ころんでも只ただは起きない覚悟で、遭難記を自分の大東新報に掲かげたが、それは市民たちの侮ぶ蔑べつを買かっただけであつた。社交界にウルランド氏が現れたときは、さすがの貴婦人たちも、一せいに背中を向けた。誰も彼もニュース映画によつてウルランド氏の生理現象を詳つまびらかに見ていたので、そういう人物と握手しようとは、誰一人として思わなかつたのである。

ここに於おいて楊博士の復讐ふくしゅうは、ようやく成つたようであるが、その後、この広シヤンい上海ハイのなかに博士の姿を見た者は只の一人もなかつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第7巻 地球要塞」三一書房

1990（平成2）年4月30日第1版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：浅原庸子

2002年10月21日作成

2003年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

見えざる敵

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>